

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2000-239123

(43)Date of publication of application : 05.09.2000

(51)Int.Cl. A61K 7/00
A61K 7/021
A61K 7/025
A61K 7/032
A61K 7/42

(21)Application number : 11-042755 (71)Applicant : NOF CORP

(22)Date of filing : 22.02.1999 (72)Inventor : HARUI HITOSHI
SHIRASAKI NARIYOSHI
KODAMA YUKIE

(54) OILY GEL-LIKE COMPOSITION AND COSMETIC COMPRISING THE SAME FORMULATED THEREIN

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain both an oily gel-like composition good in extensibility and excellent in safety and stability and a cosmetic prepared by formulating the composition, good in the extensibility and excellent in feeling of use.

SOLUTION: The characteristic of this oily gel-like composition is a formulation of (a) 30-55 wt.% of a 12-30C unsaturated alcohol or a 12-30C branched alcohol with (b) 10-25 wt.% of an amphoteric surfactant and the balance of water in (5/3) to (10/3) weight ratio (a)/(b) of the ingredients (a) to (b).

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of
rejection]

[Kind of final disposal of application other than
the examiner's decision of rejection or
application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision
of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2000-239123

(P2000-239123A)

(43)公開日 平成12年9月5日(2000.9.5)

(51)Int.Cl.⁷

A 61 K 7/00
7/021
7/025
7/032
7/42

識別記号

F I

A 61 K 7/00
7/021
7/025
7/032
7/42

マークコード(参考)

R 4C083

審査請求 未請求 請求項の数3 O.L (全10頁)

(21)出願番号

特願平11-42755

(22)出願日

平成11年2月22日(1999.2.22)

(71)出願人 000004341

日本油脂株式会社

東京都渋谷区恵比寿四丁目20番3号

(72)発明者 春井 等

大阪府守口市南寺方南通1-7-7-107

(72)発明者 白崎 斎美

兵庫県西宮市東鳴尾町2-5-3-101

(72)発明者 児玉 友木江

兵庫県宝塚市栄町3-2-46

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 油性ゲル状組成物およびそれを配合する化粧料

(57)【要約】

【課題】 のびが良く、かつ安全性および安定性に優れた油性ゲル状組成物およびこの油性ゲル状組成物を配合したのびが良い、使用感に優れた化粧料を提供する。

【解決手段】 (a) 炭素数12~30の不飽和アルコール、または炭素数12~30の分岐アルコールを30~55重量%、(b) 両性界面活性剤を10~25重量%配合し、残部が水であり、(a)と(b)の重量比(a)/(b)が5/3~10/3であることを特徴とする油性ゲル状組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 (a) 炭素数12～30の不飽和アルコール、または炭素数12～30の分岐アルコールを30～55重量%、(b) 両性界面活性剤を10～25重量%配合し、残部が水であり、(a)と(b)の重量比(a)/(b)が5/3～10/3であることを特徴とする油性ゲル状組成物。

【請求項2】 不飽和アルコールの炭素数が16～24であり、分岐アルコールがイソステアリルアルコールであることを特徴とする請求項1記載の油性ゲル状組成物。

【請求項3】 請求項1または請求項2記載の油性ゲル状組成物を配合することを特徴とする化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明はのびが良く、かつ安全性および安定性に優れた油性ゲル状組成物およびこの油性ゲル状組成物を配合したのびが良い、使用感に優れた化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】 従来より油性のゲル状組成物を得る方法としては、液状油分に無水ケイ酸を配合する方法、金属石鹼を配合する方法、あるいはデキストリン脂肪酸エステルを配合する方法等がよく知られている。しかし、無水ケイ酸や金属石鹼を配合する方法では、ゲル化するためにこれらの成分を多量に配合せねばならず、そのためにのびが著しく悪くなるという欠点があった。またデキストリン脂肪酸エステルを配合する方法では、一旦ゲル化した油性ゲル状組成物に応力シェアをかけるとゲル構造が崩れ、再び元のゲル状に回復しないという欠点があり安定性に問題があった。また、化粧料への応用では加熱して容器に充填せねばならず作業性にも問題があつた。

【0003】 これらの問題点を改良する方法として、例えば特開平4-59716号公報には、無水ケイ酸、非イオン性界面活性剤、液状油等を配合する方法、特開平6-73366号公報には、12-ヒドロキシステアリン酸と、芳香族カルボン酸、フェノール類、アミノ酸、炭素数2～10のオキシカルボン酸、無機塩のうちから選ばれた少なくとも1つの酸またはフェノール類を配合する方法、特開平6-263618号公報には、疎水性霧状シリカゲル、ワックス、液体油脂などを配合する方法、特開平8-73313号公報には、炭化水素油分、ポリエーテル変性シリコーン、水、低級アルコールなどを配合する方法、特開平9-59140号公報には、炭素数12～22のヒドロキシ脂肪酸と親水性非イオン性界面活性剤を配合する方法、特開平9-208446号公報には、ジイソステアリルリン酸金属塩を配合する方法、特開平9-249528号公報には、エチレンオキシド付加型非イオン性界面活性剤、シリカゲル、多価ア

ルコールなどを配合する方法等が開示されている。しかし、これらのいずれの方法も「のびの良さ」、「安全性の高さ」、「安定性の良さ」の全てを満足させるものではなく、その効果は不充分であり実用上未だ満足の得られるものではなかった。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 本発明はこの様な状況を鑑み、のびが良く、かつ安全性および安定性に優れた油性ゲル状組成物およびこの油性ゲル状組成物を配合したのびが良い、使用感に優れた化粧料を提供することを目的する。

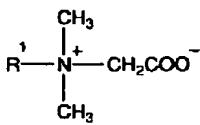
【0005】

【課題を解決するための手段】 本発明者は、上記の課題を解決すべく鋭意研究を重ねた結果、本発明を完成するに至った。すなわち本発明は、(a) 炭素数12～30の不飽和アルコール、または炭素数12～30の分岐アルコールを30～55重量%、(b) 両性界面活性剤を10～25重量%含有し、残部が水であり、(a)と(b)の重量比(a)/(b)が5/3～10/3であることを特徴とする油性ゲル状組成物、およびこの油性ゲル状組成物を配合することを特徴とする化粧料である。

【0006】

【発明の実施の形態】 以下、本発明の構成について詳細に説明する。本発明で用いられる炭素数12～30の不飽和アルコールとしては、ドデセニルアルコール、テトラデセニルアルコール、ヘキサデセニルアルコール、オクタデセニルアルコール、エイコセニルアルコール、ドコセニルアルコール、テトラコセニルアルコール、ヘキサコセニルアルコール、オクタコセニルアルコール、トリアコチニルアルコール、ホホバアルコール等を挙げることができ、好ましくは炭素数16～24であり、より好ましくはオクタデセニルアルコールおよびホホバアルコールである。

【0007】 炭素数12～30の分岐アルコールとしては、イソドデシルアルコール、2-ブチルオクチルアルコール、イソテトラデシルアルコール、2-ベンチルノニルアルコール、イソヘキサデシルアルコール、2-ヘキシルデシルアルコール、イソオクタデシルアルコール、2-ヘプチルウンデシルアルコール、2-イソヘプチルウンデシルアルコール、イソステアリルアルコール、2-ノニルノニルアルコール、イソエイコシルアルコール、2-オクチルドデシルアルコール、2-イソオクチルイソドデシルアルコール、イソドコシルアルコール、2-デシルテトラデシルアルコール、イソテトラコシルアルコール、2-デシルテトラデシルアルコール、イソヘキサコシルアルコール、2-ウンデシルペンタデシルアルコール、イソオクタコシルアルコール、イソトリアコンチルアルコール等を挙げることができ、好ましくはイソス



【5】

テアリルアルコールである。

【0008】不飽和アルコール、または分岐アルコールの炭素数が12より短いと安全性が悪くなり、逆に炭素数が30より長いとのびが悪くなり好ましくない。また炭素数12~30の不飽和アルコール、または炭素数12~30の分岐アルコールの含有量は、30~55重量%であり、好ましくは35~50重量%である。炭素数12~30の不飽和アルコール、または炭素数12~30の分岐アルコールの含有量が30重量%未満であると、ゲルが固くなりすぎ極端にのびが悪くなり、含有量が55重量%を超えると、ゲル状を呈せず液状となり安定性が悪くなる。

【0009】本発明で用いられる、両性界面活性剤は、式【1】で示されるN-アルキルアミノ酸型両性界面活性剤、

【0010】

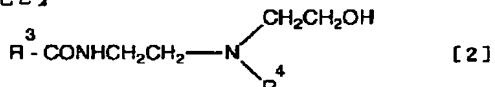
【化1】



【0011】式【2】で示されるアミドアミン型両性界面活性剤、

【0012】

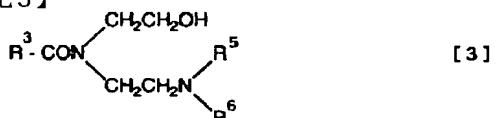
【化2】



【0013】式【3】で示されるアミドアミン型両性界面活性剤、

【0014】

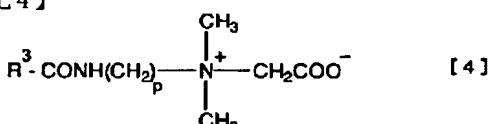
【化3】



【0015】式【4】で示されるアミドベタイン型両性界面活性剤、

【0016】

【化4】



【0017】式【5】で示されるアルキルベタイン型両性界面活性剤、

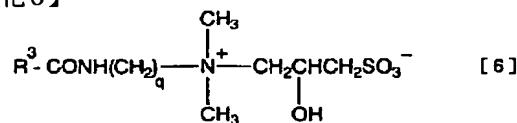
【0018】

【化5】

【0019】式【6】で示されるアルキルスルホベタイン型両性界面活性剤を含有する。

【0020】

【化6】



【0021】(R¹は炭素数8~22のアルキル基、またはアルケニル基であり、R²は水素原子または-(CH₂)_n-COOM²であり、R³CO-は炭素数8~22のアシル基、R⁴は-CH₂COOMまたは-CH₂CH₂COOM(ただし、Mは水素原子、アルカリ金属または有機アンモニウム基を示す)であり、R⁵は-CH₂COOMまたは-CH₂CH₂COOM(ただし、Mは水素原子、アルカリ金属または有機アンモニウム基を示す)であり、R⁶は-CH₂COOMまたは-CH₂CH₂COOM(ただし、Mは水素原子、アルカリ金属または有機アンモニウム基を示す)または水素原子であり、M¹およびM²は水素原子、アルカリ金属、アルカリ土類金属、アンモニウム基、アルカノールアンモニウム基または塩基性アミノ酸のカチオン性残基であり、mおよびnは1~3の整数、pは2~4の整数、qは2~4の整数である。)

【0022】R¹で示される炭素数8~22のアルキル基またはアルケニル基としては、例えば、オクチル基、デシル基、ドデシル基、テトラデシル基、ヘキサデシル基、オクタデシル基、ドコシル基、オクタデセニル基、ヤシ油アルキル基、パーム核油アルキル基、硬化牛脂アルキル基などを挙げることができ、好ましくはデシル基、ドデシル基、テトラデシル基、ヤシ油アルキル基およびパーム核油アルキル基である。

【0023】R³CO-で示される炭素数8~22のアシル基としては、例えば、カプリロイル基、カプリノイル基、ラウロイル基、ミリストイル基、パルミトイル基、ステアロイル基、ベヘノイル基、オレオイル基、ヤシ油脂肪酸アシル基、パーム核油脂肪酸アシル基、硬化牛脂脂肪酸アシル基などを挙げることができ、好ましくはカプリロイル基、ラウロイル基、ミリストイル基、ヤシ油アシル基およびパーム核油アシル基である。

【0024】M¹およびM²で示される水素原子、アルカリ金属、アルカリ土類金属、アンモニウム基、アルカノールアンモニウム基または塩基性アミノ酸のカチオン性残基としては、ナトリウム、カリウムなどのアルカリ金属、カルシウム、マグネシウムなどのアルカリ土類金属、モノエタノールアンモニウム、ジエタノールアンモ

ニウム、トリエタノールアンモニウムなどのアルカノールアンモニウム基、リジン、アルギニン、ヒスチジンなどの塩基アミノ酸のカチオン性残基が挙げられ、好ましくは水素原子、ナトリウムおよびカリウムである。 M^1 と M^2 はそれぞれ同一でも異なっていても良い。式

[2] および [3]において、Mで示される水素原子、アルカリ金属または有機アンモニウム基としては、ナトリウム、カリウムなどのアルカリ金属、モノエタノールアンモニウム、ジエタノールアンモニウム、トリエタノールアンモニウムなどの有機アンモニウム基が挙げられ、好ましくは水素原子、ナトリウムおよびカリウムである。化合物中にMが2個以上ある場合、それぞれ同一でも異なっていても良いmおよびnは1~3の整数であり、好ましくは1または2である。pは2~4の整数であり、好ましくは3である。qは2~4の整数であり、好ましくは2または3である。

【0025】上記の両性界面活性剤の中で好ましくは、式[1]で示されるN-アルキルアミノ酸型両性界面活性剤、式[2]と式[3]で示されるアミドアミン型両性界面活性剤、および式[4]で示されるアミドベタイン型両性界面活性剤である。本発明で用いられる、両性界面活性剤の含有量は10~25重量%であり、より好ましくは15~20重量%である。両性界面活性剤の含有量が10重量%未満であると、ゲル状を呈せず液状となり安定性が悪くなる。また両性界面活性剤の含有量が25重量%を超えると、ゲルが固くなりすぎ極端にのびが悪くなる。また、本発明の構成成分である(a)炭素数12~30の不飽和アルコール、または炭素数12~30の分岐型アルコールと(b)両性界面活性剤の重量比(a)/(b)は5/3~10/3であり、より好ましくは2/1~5/2である。重量比(a)/(b)が5/3未満であると、ゲルが固くなりすぎ極端にのびが悪くなる。また重量比(a)/(b)が10/3を超えると、ゲル状を呈せず液状となり安定性が悪くなる。

【0026】本発明の油性ゲル状組成物を配合した化粧料としては、クリーム、乳液、クレンジングジェルなどの基礎化粧品、ファンデーション、アイシャドウ、リップカラーなどのメーキャップ化粧品、ヘアクリーム、ヘアセッティングジェルなどの頭髪用化粧品などが挙げられ、本発明の油性ゲル状組成物を配合できるものであれば特に限定されるものではない。本発明の油性ゲル状組成物の配合量は1~100重量%の範囲で配合が可能であり、使用目的により決定することができる。

【0027】本発明の化粧料には、前記の必須構成成分に加えて必要により、通常化粧料に使用される他の成分を含有せしめることができる。このような成分としては、例えば、固体パラフィン、流動パラフィン、スクワラン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス、セレン等の炭化水素、サラシミツロウ、ラノリン、オリーブ油、ホホバ油、マカデミアナッツ油等の動植物系油

脂、ラウリン酸、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、ベヘニン酸、オレイン酸等の高級脂肪酸、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン、トリ(カプリル・カプリン酸)グリセリン等の多価アルコール脂肪酸エステル、パルミチン酸イソプロピル、ミリスチン酸イソブロピル、ミリスチン酸オクチルドデシル等の高級脂肪酸エステル、メチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン等のシリコーン油、グリセリン、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール、ヘキシレングリコール、イソブロピレングリコール、ペンタエリスリトール、ポリエチレングルコール等の多価アルコール、ポリオキシエチレンアルキルエーテル、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ソルビタン脂肪酸エステル、グリセリン脂肪酸エステル、ポリグリセリン脂肪酸エステル、プロピレングリコール脂肪酸エステル、ショ糖脂肪酸エステル、アルカノールアマイド、アルキルアミンオキシド、アルキルポリグルコシド等の非イオン性界面活性剤、高級脂肪酸石鹼、アルキル硫酸塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテル硫酸塩、アルキルエーテルリン酸塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテルリン酸塩、アシルメチルタウリン塩、アシルタウリン塩、アシルメチルアラニン塩、アシルアラニン塩、アシルグルタミン酸塩、アシルグリシン塩、イセチオン酸塩、スルホコハク酸塩、ポリオキシエチレンアルキルアミドエーテル硫酸塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテルカルボン酸塩、グリセリル硫酸塩等のアニオン性界面活性剤、ハロゲン化モノアルキルアンモニウム、ハロゲン化ジアルキルアンモニウム、ハロゲン化アルキルベンジルアンモニウム等のカチオン性界面活性剤、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシビニルポリマー、ポリアクリル酸ナトリウム、ヒアルロン酸ナトリウム、キサンタンガム等の高分子、酸化チタンおよびその疎水化表面処理物、酸化亜鉛およびその疎水化表面処理物、タルクおよびその疎水化表面処理物、マイカおよびその疎水化表面処理物、セリサイトおよびその疎水化表面処理物、カオリンおよびその疎水化表面処理物、酸化鉄およびその疎水化表面処理物、雲母チタンおよびその疎水化表面処理物、有機顔料等の粉体、パラベン、サリチル酸およびその塩、安息香酸およびその塩、ソルビン酸およびその塩等の防腐剤、ジブチルヒドロキシトルエン、酢酸トコフェロール、亜硫酸塩等の酸化防止剤、ヒドロキシエタノジホスホン酸、エデト酸およびその塩等の金属イオン封鎖剤、パラジメチルアミノ安息香酸2-エチルヘキシル、パラメトキシケイ皮酸2-エチルヘキシル、オキシベンゾン等の紫外線吸収剤、動植物抽出エキス、香料等が挙げられる。

【0028】

【実施例】以下に、実施例を挙げて本発明をさらに詳細に説明する。なお、油性ゲル状組成物およびこれを配合

した化粧料の評価は、下記の方法により行った。

【0029】(1) 粘度
25°Cにおける油性ゲル状組成物の粘度を、B型粘度計を用いて測定した。

(2) のびの良さ

専門女性パネラー25名により、肌への塗布試験を行ない、下記の判定基準で官能評価した。

◎：専門パネラー25名中22名以上が、のびが良いと判定。

○：専門パネラー25名中16～21名が、のびが良いと判定。

△：専門パネラー25名中10～15名が、のびが良いと判定。

×：専門パネラー25名中9名以下が、のびが良いと判定。

【0030】(3) 安全性試験

専門女性パネラー25名により、肌へ30分間の連続塗布試験を行ない、下記の判定基準で官能評価した。

◎：専門パネラー25名中3名以下が、肌がヒリヒリすると判定。

○：専門パネラー25名中4～9名が、肌がヒリヒリす*

実施例1

(成 分)

配合量(重量%)

イソステアリルアルコール

40.00

(PRISORINE 3515：ユニケマ社製)

ラウリルイミノジ酢酸ナトリウム^{b)}

20.00

イオン交換水

40.00

1) 式 [1]において、R¹ : C₁₂H₂₅、R² : CH₂C

OONa (n : 2, M² : Na)、M¹ : Naである両性※

※界面活性剤。

【0033】

比較例1

(成 分)

配合量(重量%)

イソステアリルアルコール

95.00

(PRISORINE 3515：ユニケマ社製)

無水ケイ酸

5.00

(エロジルR-972：日本エロジル(株)製)

【0034】

比較例2

(成 分)

配合量(重量%)

イソステアリルアルコール

97.00

(PRISORINE 3515：ユニケマ社製)

デキストリン脂肪酸エステル

3.00

(レオパールKL：千葉製粉(株)製)

★ ★ 【表1】

表1 性能評価結果

	粘度 (ヒザン・イズ*)	のびの良さ	安全性試験	安定性試験
実施例1	75,000	○	○	○
比較例1	63,000	×	○	△
比較例2	97,000	○	○	×

【0036】表1からも明らかなように、本発明の油性ゲル状組成物は「のびの良さ」、「安全性の高さ」、

* ると判定。

△：専門パネラー25名中10～15名が、肌がヒリヒリすると判定。

×：専門パネラー25名中16名以上が、肌がヒリヒリすると判定。

【0031】(4) 安定性試験

本発明の油性ゲル状組成物を45°Cの条件下で1ヶ月間保存した後の外観を観察し、下記の判定基準で評価した。

10 ○：非常に良好 … 全く分離が認められない。

○：良好 … かすかに分離傾向があるものの室温に戻せば回復する。

△：やや不良 … かすかに分離傾向があり、室温に戻しても回復しない。

×：不良 … 著しく分離する。

以下に示す組成の油性ゲル状組成物を調製し評価を行った。また、比較例として無水ケイ酸を用いた油性ゲル状組成物とデキストリン脂肪酸エステルを用いた油性ゲル状組成物を調製した。結果を表1に示す。

20 【0032】

配合量(重量%)

40.00

20.00

40.00

配合量(重量%)

95.00

5.00

3.00

「安定性の良さ」とも、従来より使用されている無水ケイ酸やデキストリン脂肪酸エステルを用いたものに比べ優れている。

実施例2～4および比較例3～24

また、本発明の油性ゲル状組成物と特許請求の範囲外の*

表2

		実施例2	実施例3	実施例4
配合組成(%)	a	ホホバアルコール ¹⁾	40	40
		イソステアリルアルコール ²⁾	—	40
	b	ト'デシルイミノ酢酸ナトリウム	18	—
		ヤシ油脂肪酸アミドアロヒドロキシルベータイン ³⁾	—	18
		ラウロイルアミドアロヒドロキシルベータイン ⁴⁾	—	18
		イオン交換水	42	42
性能	重量比(a)/(b)	20/9	20/9	20/9
	粘度(センチポイス)	67,000	72,000	59,000
	のびの良さ	◎	◎	◎
	安全性試験	◎	◎	◎
	安定性試験	◎	◎	◎

【0038】1) ホホバアルコール（香料興業（株）
製）

2) PRISORINE 3515（ユニケマ社製）

3) 式[4]において、R³CO：ヤシ油アシル基、
p：3である両性界面活性剤

※4) 式[6]において、R³CO：ラウロイル基、p：
20/3である両性界面活性剤

【0039】

【表3】

表3

		比較例3	比較例4	比較例5	比較例6
配合組成(%)	オクタノール	40	—	—	—
	ト'トリアノンチルアルコール	—	40	—	—
	トリメチルヘプチルアルコール	—	—	40	—
	2-ヘキサデシルオクタデシルアルコール	—	—	—	40
	ト'デシルイミノ酢酸ナトリウム	18	—	—	18
	ヤシ油脂肪酸アミドアロヒドロキシルベータイン	—	18	—	—
性能	ラウリルアミドアロヒドロキシルベータイン	—	—	18	—
	イオン交換水	42	42	42	42
	重量比(a)/(b)	20/9	20/9	20/9	20/9
	粘度(センチポイス)	25,000	150,000	35,000	540,000
	のびの良さ	◎	×	◎	×
	安全性試験	×	◎	×	◎
	安定性試験	×	○	△	○

【0040】

【表4】

表4
11

		比較例 7	比較例 8	比較例 9	比較例 10
配合組成	a	木パーカル イソステアリカルコール	40 —	— 40	— 40
		ラウロイルメチルタウリナトリウム	18	— 18	— 18
		N-ラウロイル-L-グリセリン酸ナトリウム	—	18	— 18
		イオン交換水	42	42	42
重量比 (a) / (b)		20/9	20/9	20/9	20/9
性能	粘度 (センチポイス)	2,500	3,200	4,900	3,800
	のびの良さ	◎	◎	◎	◎
	安全性試験	◎	◎	◎	◎
	安定性試験	×	×	×	×

【0041】

* * 【表5】

表5

		比較例 11	比較例 12	比較例 13
配合組成(%)	a	木パーカル イソステアリカルコール	— 20	20 —
		ドデシルミンジ酢酸ナトリウム	20	— —
	b	ヤシ油脂肪酸アミドアヒルペタイン	— —	20 —
		ラウリル酸アミドアヒルヒドロキシルペタイン	— —	20 —
イオン交換水		60	60	60
重量比 (a) / (b)		1/1	1/1	1/1
性能	粘度 (センチポイス)	450,000	360,000	510,000
	のびの良さ	×	×	×
	安全性試験	◎	◎	◎
	安定性試験	◎	◎	◎

【0042】

※30※ 【表6】

表6

		比較例 14	比較例 15	比較例 16	比較例 17
配合組成(%)	a	木パーカル イソステアリカルコール	60 —	60 —	40 —
		ドデシルミンジ酢酸ナトリウム	20	— —	8 —
	b	ヤシ油脂肪酸アミドアヒルペタイン	— —	20 —	— —
		ラウリル酸アミドアヒルヒドロキシルペタイン	— —	20 —	— —
イオン交換水		20	20	20	52
重量比 (a) / (b)		3/1	3/1	3/1	5/1
性能	粘度 (センチポイス)	6,100	4,600	3,200	2,900
	のびの良さ	◎	◎	◎	◎
	安全性試験	◎	◎	◎	◎
	安定性試験	×	×	×	×

【0043】

【表7】

13
表7

		比較例 18	比較例 19	比較例 20	比較例 21
配合組成(%)	a	ホホバアルコール イソステアリルアルコール	— 40	40 —	— 40
	b	トデシルミンジ酢酸ナトリウム ラウリル脂肪酸アミドブチルヘキサメチルベタイン	— 8	— 8	35 35
		イオン交換水	52	52	25 25
		重量比(a)/(b)	5/1	5/1	8/7 8/7
	性能	粘度(センチポイズ)	3,600	4,700	860,000 760,000
		のびの良さ	◎	◎	× ×
		安全性試験	◎	◎	× ×
		安定性試験	×	×	△ ×

【0044】

* * 【表8】

表8

		比較例 22	比較例 23	比較例 24
配合組成(%)	a	ホホバアルコール イソステアリルアルコール	40	48 —
	b	トデシルミンジ酢酸ナトリウム ラウリル脂肪酸アミドブチルヘキサメチルベタイン	— 35	12 —
		イオン交換水	25	40 47
		重量比(a)/(b)	8/7	4/1 8/7
	性能	粘度(センチポイズ)	510,000	8,900 860,000
		のびの良さ	×	◎ ×
		安全性試験	×	◎ ○
		安定性試験	△	× △

【0045】以上の結果より、実施例2～4の本発明の成分を用いた油性ゲル状組成物はいずれも「のびの良さ」、「安全性の高さ」、「安定性の良さ」を全てを同時に満足させる優れたものである。一方、比較例3～4の処方では、「のびの良さ」、「安全性の高さ」、「安定性の良さ」の全てを同時に満足させることができない。

【0046】更に、詳しく言えば、(a)のアルコールの炭素数が12より短い不飽和アルコールを使用した比較例3では安全性、安定性が悪く、炭素数が30より長い不飽和アルコールを使用した比較例4ではゲルが固くなりすぎのびが悪かった。またアルコールの炭素数が12より短い分岐型アルコールを使用した比較例5では安全性、安定性が悪く、炭素数が30より長い分岐型アルコールを使用した比較例6ではゲルが固くなりすぎのびが悪かった。また、(b)が両性界面活性剤でない比較例7～10では十分にゲル状を呈せず、安定性が悪い。※

(油性ゲル状組成物の配合組成、重量%)

(イ) ホホバアルコール

※(a)の配合量が本発明の範囲より少ない比較例11～13ではゲルが固くなりすぎのびが悪い。逆に、成分(a)の配合量が本発明の範囲より多い比較例14～16ではゲル状を呈せず液状となり安定性が悪い。また、(b)の配合量が本発明の範囲より少ない比較例17～19ではゲル状を呈せず液状となり安定性が悪い。逆に、(b)の配合量が本発明の範囲より多い比較例20～22ではゲルが固くなりすぎのびが悪い。また、

40 (a)と(b)の配合量は本発明の範囲内であるが、重量比(a)/(b)が本発明の範囲より大きい比較例23ではゲル状を呈せず液状となり安定性が悪い。逆に、重量比(a)/(b)が本発明の範囲より小さい比較例24ではゲルが固くなりすぎのびが悪い。

【0047】実施例5

以下に示す油性ゲル状組成物を作成し、それを配合したサンスクリーンジェルを下記製法で調整し、評価を行った。

15

16

(ホホバアルコール：香栄興業(株)製)

(ロ) ヤシ油脂肪酸アミドプロピルベタイン	20. 75
(ハ) イオン交換水	32. 08
(サンスクリーンジェルの配合組成、重量%)	
(1) 油性ゲル状組成物	53. 00
(2) デカメチルシクロペンタシロキサン	37. 00
(3) パラメトキシケイ皮酸2-エチルヘキシリ	5. 00
(4) オキシベンゾン	2. 00
(5) 4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン	3. 00

(製法) (イ)～(ハ)を均一混合し(1)油性ゲル状 10*【0048】実施例6

組成物を調製する。一方(2)～(5)を加温して均一溶解し、これに油性ゲル状組成物を添加し均一に混合した。得られたサンスクリーンジェルはのびが良く、使用感に優れたものであった。

以下に示す油性ゲル状組成物を作成し、それを配合したクレンジングジェルを下記製法で調整し、評価を行った。

*

(油性ゲル状組成物の配合組成、重量%)	
(イ) オクタデシルアルコール	41. 67
(NOFABLE AO-85：日本油脂(株)製)	
(ロ) ドデシルジメチルアミノ酢酸ベタイン	19. 44
(ハ) イオン交換水	38. 89

(クレンジングジェルの配合組成、重量%)	
(1) 油性ゲル状組成物	72. 00
(2) モノラウリン酸ポリオキシエチレン(20モル)ソルビタン	28. 00

(製法) (イ)～(ハ)を均一混合し(1)油性ゲル状組成物を調製する。この油性ゲル状組成物に(2)を添加し均一に混合した。得られたクレンジングジェルはのびが良く、使用感に優れたものであった。

※【0049】実施例7

以下に示す油性ゲル状組成物を作成し、それを配合したファンデーションを下記製法で調整し、評価を行った。

※

(油性ゲル状組成物の配合組成、重量%)	
(イ) イソステアリルアルコール	42. 86
(PRISORINE 3515：ユニケマ社製)	
(ロ) ラウリン酸アミドプロピルヒドロキシルホベタイン	18. 18
(ハ) イオン交換水	38. 96

(ファンデーションの配合組成、重量%)	
(1) 油性ゲル状組成物	77. 00
(2) シリコーン処理酸化チタン	9. 00
(3) シリコーン処理黄酸化鉄	0. 95
(4) シリコーン処理ベンガラ	0. 33
(5) シリコーン処理黒酸化鉄	0. 02
(6) シリコーン処理タルク	12. 70

(製法) (イ)～(ハ)を均一混合し(1)油性ゲル状組成物を調製する。この油性ゲル状組成物に(2)～(6)を添加し予備混合した後、3本ローラーで均一に混合した。得られたファンデーションはのびが良く、使

★用感に優れたものであった。

40【0050】実施例8

以下に示す油性ゲル状組成物を作成し、それを配合したアイシャドーを下記製法で調整し、評価を行った。

(油性ゲル状組成物の配合組成、重量%)	
(イ) ホホバアルコール	40. 00
(ロ) ドデシルジメチルアミノ酢酸ベタイン	18. 00
(ハ) イオン交換水	42. 00
(アイシャドーの配合組成、重量%)	
(1) 油性ゲル状組成物	50. 00
(2) フッ素化合物処理雲母チタン	22. 50
(3) フッ素化合物処理タルク	15. 00

17

18

- (4) フッ素化合物処理カオリン
(5) フッ素化合物処理グンジョウ

6. 25
6. 25

(製法) (イ)～(ハ)を均一混合し(1)油性ゲル状組成物を調製する。この油性ゲル状組成物に(2)～(5)を添加し均一に混合した。こうして得られたアイシャドーはのびが良く、使用感に優れたものであった。
※

*【0051】実施例9

以下に示す油性ゲル状組成物を作成し、それを配合したリップカラーを下記製法で調整し、評価を行った。

(油性ゲル状組成物の配合組成、重量%)

(イ) イソステアリルアルコール	40. 00
(ロ) パーム核油アミドプロピルヒドロキシルホベタイン	18. 00
(ハ) イオン交換水	42. 00

(リップカラーの配合組成、重量%)

(1) 油性ゲル状組成物	75. 00
(2) 赤色201号	2. 50
(3) 赤色202号	2. 00
(4) 赤色226号	2. 00
(5) 酸化チタン	2. 00
(6) ヒマシ油	16. 50

(製法) (イ)～(ハ)を均一混合し(1)油性ゲル状組成物を調製する。一方(2)～(6)を予備混合した後、3本ローラーで均一に混合する。これを先に調製した油性ゲル状組成物に添加し均一に混合した。得られたリップカラーはのびが良く、使用感に優れたものであった。

※

※【0052】

【発明の効果】本発明の油性ゲル状組成物はのびが良く、かつ安全性および安定性に優れたものであった。また、この油性ゲル状組成物を配合した化粧料は、のびが良く使用感に優れたものであった。

フロントページの続き

F ターム(参考) 4C083 AA122 AB051 AB232 AB242
AB432 AC081 AC082 AC091
AC092 AC212 AC342 AC442
AC662 AC712 AC782 AC862
AD172 BB07 CC01 CC12
CC13 CC14 CC19 CC23 DD30
DD41 EE01 EE06 EE10 EE17
FF05